

森を育てる会の立ち上げから 私たちを見ていた 初代担当レンジャー 中村聡氏にインタビュー



カブトムシの森の前で当時を語る中村氏（05年12月3日）

<レンジャー主導からボランティアへ>

市民ボランティア団体の立ち上げというのは、とにかく初めての試みでしたので「やってみないとわからない」というのが正直な気持ちでした。同じ野鳥の会のレンジャーがコーディネートしている横浜の「雑木林ファンクラブ」などの情報をもったりしました。

会を立ち上げた初期は、センターが立てたプログラムに参加者が乗

っかるという状況でしたが、その頃から将来ボランティアに運営を受け渡したいと思いながら準備をしていました。ボランティアが自分たちで運営していかないと面白くないだろうと考えたことと、将来的に「森会で育った人は会の外に出て活躍する」というビジョンから、自主的な運営ができる組織になって欲しいと思っていました。そのために、「うん・えー会（運営会）」などで、「みんなはどうしたいのか」と常に問い続けてきました。自主運営には自分の考えをまとめる力が必要でした。こちらから何がしたいのか常に聞き、ボランティアが動きやすく、やりたいことのできる仕組みをつくることを考えていました。たとえば一人の人に負担が掛からないようになど運営会でみんなで話し合いながら進めました。「うん・えー会」というネーミングは、うんと納得してうなずいたり、えーっと疑問をもったり、みんなが思うことを自由に出せる場にしたいと考えからです。合意形成を大切に、「みんなでつくる」文化を培ってきました。

自主的な運営が比較的スムーズに行ったのは、ボランティアへ受け渡すタイミングをずっとはかってきたからだと思います。固定メンバーを増やしていき、感触を確かめながら、ひとつずつ世話役という形で受け渡していきました。たとえば、草刈では世話役が作業範囲などの計画も立てるようになりました。それらの世話役を受けてくれる人が揃っていたことが成功の理由だと思います。

<カブトムシの森のはじまりとこれから>

ところで、カブトムシの森はカブトムシを見るための森として設置されました。「カブトムシ」という言葉は魔力を持つ、魔法の言葉だと感じています。子どもたちにはクワガタより断然カブトムシの方に人気があります。開園当事、生物多様性についての認識があり、矛盾を感じながらもカブトムシの放虫会などのイベントをおこないました。遺伝子攪乱などの問題を考えると、今となっては悔やまれます。カブトムシの森の事業は、ねらいは正しかったのですが、今となっては、方法は間違っていたといわざるを得ないと思います。

油山自然観察の森も、森会も最前線の研究者とのパイプがあります。それは他の施設、団体にはない大きな利点です。この利点を生かし、さらなる環境教育施設としての役割を担って欲しいと思います。

植樹した当時、カブトムシの観察小屋からは市街地が見通せました。今、木々の育った同じ場所に立ってみてみると、12年でこんなに木が生長し、こんな鬱蒼とした森になるんだ、自然の力はすごいなと感じます。間伐も順調に進んでいるように感じます。観察素材の多さ、観察しやすい立地など条件の揃った良い森に育っていると思います。

※中村聡氏は95年～99年12月まで森を育てる会の担当レンジャー